

外科通論

佐藤進講義
門人筆記
十二

佐藤進講義
門人筆記

外科通論

明治十二年十一月
十六日板權免許

佐藤尚中藏版

外科通論卷之十二

佐藤進講義

門人筆記

第十四編

軟組織慢性炎

○第二十九章

○解剖的變化

○肥厚及肥大
○分泌過多

○化膿

○寒性膿腫

○下垂膿腫

○慢性炎繼發病
○症候總論

○經過

通論中以上論說ハ總テ急性疾患ニ屬ス是

レヨリ以下慢性疾患ニ就テ論セントス先ツ最初ニ諸般軟組織ノ慢性炎ヲ論スヘシ抑慢性炎ハ組織ノ含密的及ヒ器械的變化ト給養的變化ヲ以テ之カ主症トナスハ急性炎ニ同フシテ而シテ組織ノ軟化、溶解分子ノ頽敗或ハ壞死等諸般ノ症狀ヲ繼發シ其他血管擴張滲出、組織新生等ノ諸症ヲモ併發スルモノトス是ヲ以テ慢性炎ハ右諸症ノ經過ト性狀ニ從テ益諸般ノ現象ヲ呈スルモノナリ又慢性炎ノ原因ヲ搜索スルト易カラス而シテ其原因亦大ニ複雑ナルモノ

トス如何トナレハ慢性炎ハ火傷挫傷等ノ如ク
一定ノ經過ヲ具フル一時ノ刺戟及ヒ單易ノ外
傷ニ就テ論スルカ如ク易カラズ其由テ起ル源
由ヲ説明シ且ツ如何ノ理由ニ原ツキテ慢性ナ
ルカヲ問フヲ要スルカ故ナリ
慢性炎ニ由テ生スル解剖的變化ハ急性炎ニ於
テハカ如ク主トシテ病機ヲ存スル所ヲ結組織
トナスベシ夫レ慢性炎ニハ急性炎ノ如ク毛細
管ノ擴張及ヒ發生之ニ加フルニ組織中洩乙液
様及成形的浸淫ヲ以テ解剖的變化ノ真症トナ

スヘシ但シ慢性炎ニアリテハ毛細管擴張ト血液灌漑ノ二症ハ急性炎ノ如ク著シカラス即チ成形的浸淫ト勿乙液性浸淫ニ由テ組織ノ形體變化ヲ見ハスヲ主症トス但シ結組織中ノ細胞ノ浸淫ハ之ヲ急性炎ニ於テ見ルカ如シ而シテ結組織ハ其纖維ノ性狀ト彈力ヲ失ヒ而シテ皮下蜂窩組織モ亦延張力ト彈力ヲ失フモノナリ是ニ由テ慢性炎ニ罹ル組織ハ健組織ニ比スレハ微ニ腫張シ其質膠或ハ脈脂ノ如ク變化シ常ノ如ク動移シ易カラス是レ慢性炎ノ初期ニ目撃

スル症狀ナリ而シテ其經過ニ至リテハ下欵ニ
次ヲ逐テ論スルカ如ク甚タ諸般ナルモノトス
〔イ〕最初ハ右ニ論スルカ如ク組織中ニ滲乙液性
ト成形的浸淫ヲ見ル可シ故ニ皮膚皮下蜂窩織
關節囊靱帶、腱、靱帶、筋鞘等體中結組織ヨリ成ル
所ノ組織ニハ右ノ症狀ヲ見ハスモノナリ若シ
之ヲ切割シテ其面ヲ檢スルハ則チ無構造ニ
シテ其質粗豚脂ニ同シ殊ニ關節ノ疾患即チ慢
性關節炎ニ此變化ヲ見ルヲ多シ然レモ關節周
圍ノ皮膚ニ紅ヲ潮スルヲナキヲ以テ往時ハ之

ヲ白腫ト名ケリ固ヨリ病名穩妥ナラスト雖モ
今尚之ヲ襲用ス右ニ論スル症狀ハ即チ未タ組
織ニ著レキ變質ヲナセシモノニアラサルヲ以
テ全ク健組織ニ復スルヲ得ルモノナリ若シ
此ノ如キ組織一旦舊ニ復セントスルトキハ則
チ浸淫セシ液ハ吸收セラレ而シテ組織中
ニ新生セシ細胞ハ化シテ結組織胞トナルヲア
リ或ハ頽碎シテ消滅スルヲアリ然ル后結組織
ハ舊ノ性質ニ復シ得ルニ至ルモノナリ若シ炎
性產物此ノ如ク消散スルヲ得サルトキハ癰

痕樣肥厚ヲ遺シ經久舊ニ復セサルモノトス又
慢性炎發生ノ間血壓亢進ニ由テ組織ノ各所ニ
微小ノ溢血或ハ脈壁ヨリ赤血球ノ竄出ヲ發見
スルコアリ而シテ赤血球ハ帶褐赤色ノ色素ニ
變化シ而シテ其組織ニ黃色或ハ灰白色ヲ呈ハ
スモノナリ殊ニ赤血球多量ナルトキニ於テ然
リトス若シ炎症產物消却セシテ病機荏苒タ
ルトキハ血液ノ鬱積ニ由テ給養物過多トナリ
組織ノ分子常ニ増大且肥厚シ從テ全組織増容
ス而シテ結組織ノ間ニ浸滲セル新細胞化シテ

新結組織トナルモノナリ例之ハ皮膚ニアリテ
ハ此病機ニ由テ健皮膚ヨリ肥厚スル三倍或ハ
四倍ニ及フモノトス此ノ如ク同質ノ新生組織
ヲ舊組織中ニ形成スルヲ病理解剖上ニ於テ過
多成形ト名ク又此病機ニ由テ皮膚肥厚シテ結
節狀ヲ成スモノヲ厚皮ト名ク其他分泌變常及
ヒ内皮形成ノ變化ヲ見ハスモノナリ此ノ如キ
皮膚ノ疾患ニアリテハ表皮ノ發生盛ニシテ角
質ニ化スルヲ亦速カナリ時トシテ化角機十全
ナラスシテ成熟ニ至ラサルヲアリ

〔口〕粘膜或ハ沔乙膜ニ慢性炎ヲ生スルトキハ其組織ニ病理性變化ト分泌ノ變常ヲ現ハスヘシ但シ通常分泌過多症ヲ發スルモノトス例之ハ關節膜或ハ粘膜ノ慢性炎ニ於テ著シク之ヲ見ルカ如シ

粘膜慢性加答兒ニ罹ルトキハ時トシテ内皮著シク侵サル、コアリ或ハ結組織或ハ粘膜腺著シク侵サル、コアリテ一樣ナラス然レモ右三種ノ組織多クハ同時ニ等シク疾患ヲ蒙ムルモノナリ而シテ每常粘膜ノ實質ニ著シキ變化ヲ

見ハサスレテ過多ノ純膿白血球ヲ分泌スルモ

ノナリ蓋シ慢性粘液漏ニアリテハ脉壁弛緩シ

テ斷ヘス無數ノ漏出胞白血球ヲ竄出セシムルモ

ノナラン又關節膜ニアリテハ其症狀少シク差

異アリトス例之ハ水分ニ富ミテ膿ヲ混セサル

關節液ヲ多量ニ分泌スルモノアリ即チ關節水腫或ハ

關節膜肥厚シ著シク分泌ヲ増サ、ルモノアル

等ノ如シ

〔八〕慢性炎經過中ハ膿浸淫ト膿腫ヲ續發スルヲ

アリ其細密ナル病機ニ至テハ急性炎ニ於テ之

ヲ見ルカ如シ只慢性炎ニアリテハ其病機ノ緩
慢ナルノミ例之體中一局部ニ漏出胞即チ白血球
浸淫スルトキハ其組織軟化シ而シテ分子類敗
シ遂ニハ浸淫物其局部ニ於テ流動體ト變化ス
即チ膿ト變スルナリ殊ニ最初浸淫セラレシ組
織中ニ血管ノ發生十全ナラス且ツ給養物ノ分
量ト性質之ヲ補給スルニ足ラサルトキニ於テ
然リトス此ノ如キ作用ニ由テ漸次ニ局處ニ限
劃セシ一膿腫ヲ造ルナリ而シテ之ヲ造ル機能
ハ常ニ慢徐ナリ時トシテ紅腫熱痛ノ炎症ヲ微

レモ發ヤサルコアリ此ノ如キ作用ニ由テ生ス
ル膿腫ヲ所謂寒性膿腫ト名ク又此ノ如ク膿ヲ
渚蓄スル膿窩ヲ腔洞潰瘍ト名ク若シ此膿腫ヨ
リ漏ス所ノ膿ヲ顯微鏡ニテ檢スルトキハ微細
ノ分子ニ富ミ十全ノ性狀ヲ具フル膿球ハ却テ
稟必ナリ是レ一ハ久シク體中ニ閉鎖セラレシ
ヲ以テ膿球類碎レテ分子ト化シ一ハ含容ノ化
成作用ニテ變性スルモノナリ又膿ヲ肉眼ニテ
檢スルトキハ其膿急性炎ニ由テ生スルモノニ
比スレハ稀薄ニシテ清透ナリ而シテ微ナル纖

維質ノ凝結物及ヒ壞死セシ組織ノ小碎片ヲ其中ニ混スル者ナリ總テ寒膿腫ノ自然ニ破開スルハ數月或ハ數年ノ久シキヲ經ル可シ加之年ヲ累スルモ膿腫増大セス而シテ其裡面ニ癰痕ト同質ナル囊様物所謂膿腫膜アフセスンブランナルモノヲ造リ全ク膿ヲ其中ニ擁圍スルモノアリ若シ其渚蓄物ヲ檢スルトキハ乳劑様ノ汁液及ヒ結晶セシ脂肪ヲ見ル又時トシテ膿球ノ痕跡ヲ見ルアリ又膿腫増大セスシテ流動物漸次吸收セラレ只糜粥様ノ乾酪物ヲ遺スアリ然レハ此症ハ

甚々稀ナリ而シテ膿ヲ漏ス後治癒スル状態ハ
 之ヲ温膿腫ニ於ケルカ如ク一樣ナルモノトス
 其他一種ノ寒膿腫アリ其炎ヲ生セシ所ニ膿ヲ
 蓄蓄セスレテ之ヲ遠隔スル部局ニ留滞セシム
 ルモノ之レナリ例之ハ脊椎前部ニ慢性骨炎ヲ
 生シ其處化膿シ而シテ其膿ハ腹膜ノ後部ニア
 ル鬆疎ナル結組織中ヲ傳ヘ且大腰筋鞘ニ沿フ
 テ下方ニ垂流シ遂ニ「ポーパル」靱帶ノ上部ニ
 渚留シ此部ニ於テ腫起スルカ如シ即チ之ヲ下
 垂膿腫ト名ク

右ニ掲クル膿腫ハ時トシテ全身或ハ局處ノ作
用ニ由テ膿ヲ漏セシ後急性炎及ヒ熱症ヲ發シ
加之膿毒熱或ハ熱性消削^{マラスムス}ヲ續發スルヲアリ又
時トシテ膿ヲ泄ラス後膿腫漸次増大スルモノ
アリ或ハ破開セシ口ヨリ絶ヘス稀薄ナル惡膿
ヲ泄スモノアリ即チ之ヲ流注或ハ瘻ト名ク
〔二〕慢性炎ハ右ニ論スル經過ノ外又之ニ類似ス
ル他ノ經過ヲ成スモノナリ即チ所謂炎性新生
物ノ乾酪樣變質是ナリ抑、乾酪樣變質ヲ生スル
ヤ其初ノ組織中ニ無數ノ細胞集積シ然ル後其

細胞集積ノ中心ニ於テ分子漸次頽碎シテ糜粥
 様乾酪トナルモノナリ此成形的浸淫ハ細胞ノ
 集積ニ由テ中心ヨリ漸次外圍ニ向ツテ蔓延ス
 而シテ浸淫セラレシ組織ハ從テ漸々乾酪質ニ
 變スルモノナリ乾酪變質ニ由テ頽敗ニ至ル局
 處源由ハ化膿ニ於ケルカ如ク細胞ノ産出ニ比
 スレハ血管ヲ新生スルヲ盛ナラス或ハ新生血
 管ノ速カニ荒蕪ヲ蒙ムルニ由ルナリ此ノ如キ
 潰爛ノ病機ヲ名ケテ乾性或ハ乾酪性潰爛ト云
 若シ屍ニ就テ此ノ如キ乾酪ニ變質セシ帶黃色

ノ部局ヲ檢スルトキハ曾テ流動性ノ膿樣物變
シテ乾燥セルモノ如クナリ然ラス即チ最
初ヨリ乾燥セシ性質ヲ具フルモノナリ故ニ此
ノ乾酪質ハ直チニ炎症新生物ヨリ生スルモノ
ニシテ化膿之ニ先行セス是レ試驗ニ由テ徵ス
ルヲ得ルモノナリ例之ハ一條ノ毛線ヲ家兔
ノ皮下蜂窩織中ニ貫穿シテ炎機ヲ促カストキ
ハ數日ヲ經ル後其部ニ於テ貫穿セシ異物ノ周
圍ニ黃色ノ乾酪質ヲ發見ス但シ乾酪質ニ變ス
ル前ニ於テ微シモ流動性ノ膿ヲ見サルカ如シ

此機人獸共ニ一ナルベシト雖氏同刺戟ニ由テ
化膿スルモノアリ或ハ乾酪様變質ヲ生スルモ
ノアルカ如キハ局處ノ作用ニ關スヘシ人ニア
リテハ乾酪變質部ノ轉期及ヒ變化太ク諸般ナ
リトス之ヲ次ニ論ス

乾酪變質皮下ニ在ルトキハ此機漸々内ヨリ外
ニ向ツテ進ミ遂ニ皮膚ヲ破開ス而シテ乾酪質
漏出スルトキハ則チ空洞ヲ殘コシ此内壁寒膿
腫ニ於テ見ルカ如ク漸々合着シテ治スルモノ
ナリ又一旦乾酪ニ變セシ部ニ年月ヲ經ル後更

ニ炎ヲ生シ膿ヲ醸シテ古キ炎性産物中ニ新生
ノ炎性産物ヲ混シ遂ニ漏出セラル、モノアリ
此ノ如キ症狀ハ之ヲ慢性ノ水脈腺炎ニ數見ル
所ナリ而レテ其機多クハ荏苒歲月ヲ經テ治セ
サルモノナリ

乾酪變質部小ナルトキハ其部遂ニ萎縮シ而シ
テ微少ノ「カルク質」ヲ乾酪質中ニ取リテ即チ「カ
ルク性」コンクレメント肝腎膀胱内ニ生スルカ
如キ病性結石ヲ總稱ス
ルヲ生シ而シテ此産物癥痕組織ヨリ包圍セ
ラル、ヲアリ述フ此力如ク此轉期ハ乾酪變質

部ノ小ナルモノニ生スルモノニシテ即チ腸間
膜腺脾門ノ腺及ヒ氣管腺ニ多發スル症ナリ軀
中他ノ水脈腺ニ生スルハ其タ稀ナリトス
其他一種ノ物質ヲ血液ヨリ滲出シテ諸種ノ内
臟ニ一種ノ變質ヲ見ハスモノアリ所謂豚脂樣
變質一名澱粉變質是ナリ此疾患慢性炎ニ直接
ノ生スルモノニアラス且ツ多ク内部ノ器械ニ
屬スルヲ以テ之ヲ此ニ詳論セス
慢性炎ニ由テ生スル組織上微細ノ變化ハ甚ク
諸般ナルモノトス夫レ炎ノ主症タル細胞浸淫

ト新生物ハ多ク結組織中ニ見ハル、症ナリ此
レニ由テ其組織一旦其質ヲ變スルモ遂ニ同組
織ニ由テ回復セラル、ニアリ或ハ軟化或ハ潰
瘍ニ由テ其一部ヲ消亡スルモキハ癰痕ニ由テ
治スルニアリ若レ此機筋或ハ神經ヲ被包スル
結組織ニ見ハルモノキハ則チ其組織間接ニ障
害ヲ蒙ムルモノナリ即チ筋ノ縮質及ヒ神經纖
維ノ軸索及ヒ髓鞘給養ヲ失ヒ分子ノ頽碎及ヒ
脂肪變化等ノ症ヲ見ハスモノナリ故ニ筋ノ消
耗及ヒ麻痺ハ慢性炎ニ繼發スル症ナリ此ノ如

キ變化ヲ蒙ムル筋及神經ノ組織多少舊ニ復ス
 ルヲ得ルヤ否ハ豫メ知ル可カラスト雖モ甚
 タ微小ノリ蓋シ分子ノ頽碎ト脂肪變質ハ筋及
 ヒ神經ヲ被包スル結組織ニ炎ヲ生スルヲナク
 レテ生スルヲナキニアラス故ニヒルレヨウ氏
 目撃セシ如ク筋及ヒ神經^ニズ^レト^テグラスマ^ニノ
 脂肪變化ヲレテ筋及ヒ神經ノ炎症ニ歸スルハ
 實地ニ適切ナラサルヘシ

慢性炎ノ症狀ハ急性炎ト大ナル差異アルモノ
 ニアラス只時トシテ現發症ノ順次ヲ異ニシ或

ハ他ノ併發症ヲ見ハシ而シテ病勢ハ固ヨリ急性炎ニ比スレハ劇シキモノニアラス
慢性炎ハ急性炎ノ條下ニ論スルカ如ク紅腫熱痛及ヒ患部ノ作用障礙ヲ以テ主症トナスナリ
次ニ其諸症ヲ論ス可シ
腫脹ハ最初ニ著シク現ハル、所ノ症ニシテ洵
乙液性及ヒ成形的浸淫ヲ以テ腫起ノ源トナス
ナリ之ヲ按スレハ健部ヨリ微シク硬固ナルヲ
覺フ若シ經過久シク時日ヲ費シ膿腫ヲ生スル
トキハ則チ著シク波動ヲ覺フ

潮紅ハ血管ノ擴張ニ由ル但シ炎部軀軀ノ表面
ニアルトキハ之ヲ見ルコトヲ得ヘシ例之ハ鼻孔
粘膜眼結膜慢性炎ニ罹ルトキハ腫張潮紅及ヒ
分泌過多ノ症ヲ容易ニ目撃スヘシ又皮膚ノ慢
性炎ニアリテハ漸次微ニ赤色或ハ帶褐赤色ヲ
呈ハスモノナリ又慢性炎ノ部體軀ノ深處ニア
ルトキハ皮層ニ紅ヲ潮セス若シ炎勢深處即チ
内部ヨリ漸々外部ニ向ツテ進ミ病勢ヲ皮層ニ
傳フルトキハ則チ初メテ皮膚ニ紅ヲ潮スルモ
ノナリ例之ハ寒性膿腫ニ於テ之レヲ見ルカ如

疼痛ハ慢性炎ニ發スル症ニシテ其劇易甚ク諸般ナルモノナリ故ニ炎勢極メテ慢ナルモノニアリテハ時トシテ全ク疼痛ヲ生セサルコトアリ又其疼痛甚シク刺カ如ク或ハ裂カ如キ楚痛ヲ生スルモノアリ但シ其疼痛ハ外来ノ刺衝ニ由テ發スルコトアリ或ハ自然ニ發スルコトアリ作用ノ障礙ハ即チ患部ノ疼痛及ヒ解剖的變化ニ關係シテ生スルモノナリ然レモ時トシテ其疼痛輕微ナルコトアリ或ハ全ク生セサルモノアリ

局處溫度亢進ハ手ヲ貼スルニ由テ僅ニ之ヲ知覺スルノミ或ハ全ク知覺セサルコアリ熱ハ慢性炎ニ必見スル症ニアラス慢性炎變シテ必シク急性トナルトキ之ヲ見ハスモノナリ例之ハ化膿ノ機經久止マス之カ為ニ體力極メテ疲勞スルモノニ經驗スルヲ必ナカラス所謂溶崩熱是ナリ其熱或ハ稽留シ或ハ弛張スルコアリ蓋シ溶崩熱ハ炎性產物殊ニ頽敗セシ物質ヲ血中ニ吸收スルニ由テ生スルモノナリ故ニ大膿腫ノ壁面頽敗シ或ハ潰瘍速カニ蔓延ノ勢ヲ逞フス

ルトキ多發シ且ツ熱勢劇シキモノナリ溶崩熱
ニ罹ルトキハ患者俄カニ羸瘦シ而シテ夜汗下
利等ノ症ヲ發スルモノナリ

慢性炎ノ經過ヲ大別シテ二様トナスヲ左ノ如
シ

イ病初ハ患部ニ著シキ症狀ヲ現ハサス患者モ
亦タ之ヲ認識スルヲナキ者アリ然レモ其後初
メテ漸次紅腫熱痛作用障礙ノ症ヲ現出スルモ
ノナリ此ノ如ク病初ヨリ其經過慢ナルモノハ
其末期ニ至ルマテ其性慢ナリ

口急性炎ヨリ慢性炎ニ轉スルコアリ然レモ其
經過中時々發熱シテ急性症ヲ見ハスコアルヲ
以テ時々慢性症ヲ失フコアリ

慢性炎モ亦急性炎ノ如ク常ニ自癒シテ病ノ結
末ヲ營マントスルノ狀情ヲ具フルモノナリ故
ニ慢性炎ヨリ生スル新生物ハ若シ患部ノ組織
頽敗ニ陷ラサルトキハ必ス組織ニ一定ノ變化
ヲナシテ結組織或ハ瘢痕ヲ造リテ治ニ就カン
トスル性ヲ具フルモノナリ是レ炎症產物ト贅
腫痛腫ナルコニ纖維ヲ腫等ノ腫物ヲ云フ種別スル一大要目ナリ

然レ氏慢性炎ノ源トナルモノ退カス或ハ給養不全等ノ源由アリテ自癒ヲ妨クルトキハ炎症性產物一定ノ結局ヲ收ムルヲ能ハサルハ贅セスレテ昭カナリ

○第三十章

○慢性炎ノ源病總論○病性素因及惡液質ノ症候○療法總論○慢性炎ノ局處療法

慢性炎ノ源因ハ經久頻次ノ刺激ニシテ炎症ハ

即チ其反應ナリ故ニ經過モ亦從テ慢徐ナリト
ス次ニ局處ノ刺戟ヲ主トシテ論セントス夫レ
疥癬蟲皮膚ノ上層ニ侵入シテ漸次卵ヲ生シ其
ノ蕃殖ニ由テ皮膚ヲ經久刺戟スルトキハ即チ
皮膚ニ慢性炎ヲ生スヘシ即チ疥癬又表皮中ニ黴菌ヒルツ
侵入シテ漸々蕃殖スルトキハ即チ其ノ經久刺
戟ニ由テ慢性皮疹ヲ發ス例之輪癬ビナリアリス鱗屑疹等諸
種ノ皮疹ヲ生スルヲアルカ如シ又皮膚ノ經久
壓迫或ハ摩擦ハ即チ局處ノ慢性刺戟ニシテ之
ニ由テ多クハ局處ノ皮膚肥厚スルモノナリ例

之ハ陝隘ノ靴ヲ穿ツモノ足ノ隆起部ノ皮膚ニ
肥厚ヲ生シ俗ニ魚目或ハ棍棒搥ノ類ヲ把握シテ
恒ニ業ヲ營ムモノ手掌ノ皮膚ニ肥厚ヲ生スル
カ如ル其他一組織ヲ舎蔽的ニ經久刺戟スルト
キハ其局部ニ慢性炎ヲ起スコアリ例之ハ酒精
ニ富メル飲料ヲ常ニ嗜ムモノハ胃ノ粘膜ニ慢
性加答児ヲ生シ又尿管中ニ血液或ハ淋巴ノ經
久留滯シ或ハ凝結スルトキハ則チ尿管及其周
圍ニ成形過多或ハ尿管擴張或ハ蟠屈等諸般ノ
症ヲ發スルコアリ殊ニ下脚ノ皮下靜脈歸流ヲ

妨ケラル、トキハ此症ヲ現ハシ易シ

右ニ反シテ曾テ疾患炎症ナニ罹リシ組織ニ刺

戟物アリテ劇シク之ヲ刺衝スルトキハ健皮膚

ヲ刺戟スルカ如ク急性炎ヲ起サス慢性炎ヲ起

スヲ常トス故ニ慢性炎ニ罹ル皮膚更ニ挫傷ヲ

受ケテ其表面損壞シテ化膿シ且ツ潰瘍ヲ生ス

ルトキモ亦其治機甚々慢徐ナルモノトス急性

炎ニアリテハ速カニ創面ニ表皮ヲ造リ治癒ス

ルヲ常トス

上件論説スル慢性炎ノ如キハ其原由最モ察知

レ易キモノニ屬ス故ニ其原由タル刺戟ヲ制止
スルトキハ則チ炎症從テ消散スルモノナリ然
レモ慢性炎ノ局處原因ハ多クハ直チニ鑑識シ
得ヘキモノニアラス故ニ反復細診シテ其病因
ヲ詳カニスルヲ要ス次ニ其原因ヲ體質虛弱或
ハ各器及全身ノ慢性炎ニ罹リ易キ素質ニ取ル
者ヲ詳論ス可シ

上件論スル者ノ外又一種ノ慢性炎アリ乃チ躰
軀中一定ノ器械或ハ一定ノ部局ニ炎症ヲ時々
反復シテ生シ又其炎症ヲ一定ノ年齢或ハ一定

ノ體格構造ニ由テ發スル者ナリ而シテ攝生ノ
 異ナルニ從ヒ各自其患フル部局ヲ異ニスルヲ
 アリ例之ハ此ニ同シ年齡及躰格ヲ具フル小兒
 輩アリ一人ハ水脈腺關節若クハ骨ニ腫張ヲ生
 シ或ハ化膿ニ罹リ一人ハ慢性肺炎一人ハ冒寒
 ニ由テ筋或ハ關節ニ疼痛ヲ起ス等ノ如シ其他
 此ノ如ク慢性炎ニ罹リ易キ體質ヲ具フルモノ
 ハ其病理的性質ヲ復ヒ其子孫ニ傳フルモノト
 ス故ニ往時ハ慢性炎ニ罹リ易キ素質ヲ具フル
 者ヲ種別シテ通曉シ易カラシメタリ固ヨリ高

尚ノ理論ニ原ツキレモノニアニス只實驗上僅
カニ之ヲ區別スルヲ得ルノミ即チ淋巴性素
因腺病性素因結核性素因傷風性素因ト之ヲ區
別セシカ如レ而レテ腺病性素因ナルモノハ殊
ニ水脈管ノ疾患又結核性素因ナルモノハ潰瘍
ニ陥リ易キ結節物ヲ發生スル者ヲ名命セリ此
ノ如ク往時諸般ノ病性素因ヲ種別セシヨリ爾
來人各々此ノ意見ヲ賛成シ以テ右ニ掲クル一
定シタル疾病ノ性質ハ既ニ全身ノ生理的機能
中ニ其原芽ヲ取ラサルヲ得サルモノトシ且ツ

體中病性ノ物質アリテ全身ニ蔓延シ其病機著
シク外ニ見ハル、トキハ即チ疾病トナリ而シ
テ病性ノ物質ヲ保有スルモノヲ血液及ヒ淋巴
トナセリ

ヂスカラシ血液調和不良ノ義トハ血液ノ病理性性質

ヲ稱スル古名ニシテ今尚之ヲ襲用スト雖氏穩

妥ナラス即チ腺病性惡液質或ハ結核性惡液質

等ト名クルカ如シ往時ハ全身ノ病理變化ヲシ

テ悉ク其原ヲ血液ニ歸セシメ而シテ血液ヨリ

全身ニ其毒ヲ傳播セレムルモノトナセルニ因

ルナリ但シ毒創ノ條下ニ論スルカ如ク異常ノ
物質外ヨリ直チニ血液ニ竄入シ即チ血液ヲ毒
スルカ如キ者ニハ其病名適當スヘシト雖モ上
件論說スル諸般ノ慢性炎疾病ノ如キ者ニアリ
テハ其稱名固ヨリ適切ナラサルヘシ且ツ總テ
此ノ如キ諸般ノ病性素質父母ノ遺傳ニアラサ
ル外ハ多クハ體中未詳ノ源由アリテ發スルモ
ノナレハナリ夫レ血液ハ體中他ノ組織ノ如ク
其性質及ヒ秤量ヲ依然トシテ毫モ變換セサル
モノニアラス即チ絶ヘス新陳代謝シテ其實ヲ

改良シテ須臾モ息マサルモノナリ蓋シ血球ノ
 新陳代謝ハ體中何レノ器ナルカ未タ之ヲ詳カ
 ニスルヲ難シト雖モ血水ハ絶ヘス淋巴ヨリ補
 給セラレ而シテ淋巴ハ主トシテ腸管ヨリ乳糜
 管ニ由テ輸送セラレ而シテ全身ヲ給養スル後
 ハ諸般ノ物質復ヒ血液ヨリ排除セラル殊ニ氣
 狀體或ハ流動體トナリテ腎臟肺及皮膚ヨリ排
 泄セラル、等生理學ニ於テ人ノ知ル所ナリ是
 ヲ以テ之ヲ觀レハ健康ノ血液ハ即チ只健康ノ
 身體ヨリ産成セラレ而シテ不健康ノ血液ハ即

チ不健康ノ身體ヨリ産成セラル、モノト知ル
ヘシ今尚古名ヲ襲用シテ諸般ノ病性素質ヲ次
ニ區別スヘシ

〔其二〕淋巴性素質

一名腺病性素質即チ腺病

「スクロプロシス」ヲ常ニ腺病ト譯スルハ即チ
該疾患ニ罹ルモノ水脈腺著シク患害ヲ蒙リ
腫起スルヲ常トスルカ故ニシテ正譯ニアラ
ス病名「スクロプロシス」ハ蓋シ羅甸名「スクロ
ハ」北ヨリ引用セシモノナラン然レモ何ニ由
リ斯ク病名トナセシモノナルヤ詳カナラス

或ハ曰ク牝豚頸腺ノ腫張ニ罹ルヲ多キヲ以
テナリト或ハ曰ク牝豚ノ子ヲ生々蓄殖スル
ノ盛ナル状ヲ形容シテ之ヲ腺ノ簇々各處ニ
發生スルニ比セシモノナラント兩說固ヨリ
附會ニシテ確説ナラス又其語義ヲ此ニ搜索
スルモ實地ニ益ナシ只記シテ以テ後考ニ供
スルノミ

腺病性素質ハ殊ニ幼稚輩ニアルヲ多シトス但
シ成長人ニモ此素質ナキニアラスト雖モ稀ナ
リ抑腺病性素質ナルモノハ殊ニ水脈腺慢性炎

ニ罹リ且ツ腫張シ易キ素質ニシテ幼穉輩ニ多
シ加之僅少ノ刺戟之カ誘因トナルヲアリ其他
又皮膚ノ慢性炎イクセマインバチゴ等ノ皮膚病殊ニ顔或ハ頸
若クハ粘膜ノ慢性炎殊ニ眼結膜腸呼吸器等ノ
粘膜其他骨膜及ヒ關節膜ニモ亦慢性炎ヲ生シ
易キ素質ヲ具フルモノナリ

腺病質ニ發スル水脉腺ノ腫張殊ニ下顎或ハ後
頭部ノ水脉腺腫張ハ一種ノ刺戟ニ續發スル症
ナリトナス者アリ例之生齒頭ノイクゼマ眼炎
及耳漏等之カ原トナルモノナリト即チ水脉腺

腫ヲ繼發症トナスモノナリ又幼年ノ者些僅ノ

外傷

打撲等

ヲ關節ニ受クルトキハ即チ外傷之カ

誘因トナリ關節炎ヲ發シ易シ蓋シ腺病素質ア

ルモノニ發スル諸器ノ慢性炎ハ一ツハ局處ノ刺

戟ニ由テ起ル者トシ一ハ其原由ヲ全身ノ變常

ニ求メサル可カラス但シ氣管枝腺及ヒ腸間膜

腺腫張ノ如キハ既ニ多發スル症ナリト雖モ其

原因トナル局處ノ刺戟物ヲ未タ檢知スルヲ能

ハス

腺病性素質アル小兒ハ外貌及ヒ體質等ヨリ診

斷シ得ヘキ者ナリ其真症トナスヘキモノハ皮

膚蒼白脂肪組織肥厚、厚唇、肚腹膨脹、貪食、便秘癖

等之レナリ

知覺鈍麻
性腺病

然レ其時トシテ腺病性素

質アルモノニモ右ノ諸症ヲ見ハサ、ルモノア

リ

總テ腺病性ノ小兒ニ發スル慢性炎ノ經過及ヒ

轉期ヲ次ニ論スヘシ

慢性炎ニ由テ生スル局部ノ腫張ハ時トシテ日

ヲ經ルニ從テ全ク消却スルモノアリト雖其多

クハ化膿ニ陷ルモノナリ而シテ其經過急性ニ

類スルモノアリ即チ下顎水脈腺炎或ハ關節疾
患ニ於テ之ヲ見ルカ如シ又病症甚ク慢性ニシ
テ年ヲ經ルモ變セサルモノ少ナカラス而シテ
患部ニ膿腫ヲ生シ瘻管潰瘍等ヲ遺スモノアリ
但シ化膿シ易キ者ハ殊ニ羸瘦シテ且ツ薄弱給
養不全ナル小兒ニ多シ而シテ豫後不良ナリ
過敏性腺病而シテ水脈腺及肺ノ如キ器械ニ慢性炎
ヲ發スルトキハ即チ炎症ノ轉歸ハ殊ニ乾酪樣
變質ヲ多シトス若シ腸間膜腺此ノ如ク變質ス
ルトキハ乳糜ノ流通ヲ妨クルカ故ニ全身ノ給

養ヲ障碍シ不治ノ全身消耗症ヲ生シ易シ

腺病性素質ハ多クハ遺傳ニシテ之ノ子孫ニ傳
フルモノナリ然レニ攝生不良ナルモノハ後天
新ニ其素質ヲ得ルヲアリ若シ攝生ヲ改良シ給
養十全ナルトキハ舊ニ復スルヲ得ヘシ蓋シ
此病原トナルモノハ馬鈴薯穀粉酸敗セシ蒸餅
等ヲ食料ニ供シ或ハ濕氣アル住所若クハ空氣
流通不良及不潔等一切健康ニ害アルモノ之レ
ナリ故ニ腺病ハ貧瘠ノ者之ニ罹リ易シ
上件述フル所ノ病因症狀等ヲ参考スルトキハ

概子腺病、何者タルヲ了知シ得ヘシト雖氏次ニ乾之腺病素質ト名シヘキ疾病ノ標準トナスベキ症狀ヲ約言スヘシ

イ皮、骨、關節慢性炎ニ罹リ易ク而シテ其炎症ヨリ肉芽膿或ハ乾酪變質ヲ發生シ易キ者ヲ云
ロ一時ノ刺戟ニ由テ水脈腺腫ヲ起シ易ク而シテ其腫起依然トシテ彌久其大サヲ變セス或ハ刺戟ナクシテ自ラ腫張ヲ増進スル體質アル者ヲ云

療法總テ攝生ヲ改良スルヲ主トナス先ツ食

ヲ廢シ滋味食ヲ與フルヲ以テ專要トナス例之
牛肉雞卵牛乳等ヲ食サシメ且ツ溫浴若クハ新
鮮ノ空氣ニ呼吸シ軀軀ノ運動ヲ要ス然ルニ腺
病ハ多ク貧瘠ノ者ニ發スルヲ以テ悉ク右ノ法
方ヲ施用シ得ヘキモノニアラサルヲ如何セン
其他腺病ニ用ユル内藥甚タ多シ然ルニ往時本
ノ想像シテ腺病ハ血中ニ一種不明ノ毒物アル
ヲ以テ特異奇効ノ藥品アリテ而シテ後之ヲ制
止シ得ヘシト云ル如キ者ニアラス故ニ全身
療法ハ必竟姑息ニ過サルトリ之レ輒近醫學ノ

進歩ヲ見ルニ足ルヘキモノトス

腺病性素質ヲ良改スルニ昔ヨリ諸般ノ方法ヲ
試ミタリ往時ハ脂肪ニ富ミテ稍肥満スル小児
ニハ時々下劑ヲ投スルヲ良トシ又英國ニアリ
テハ殊ニ水銀劑ヲ小量ニ與フルヲ稱ス又消劑
シタル小児ニハ肝油最モ効アリ其他沃陳鐵舍
利別或ハ苦味強壯ノ劑効アリ又貧血ヲ見ハス
モノニハ消化シ易キ鐵劑ヲ與フ總テ腺病性ノ
體質アル者ニハ塩浴適中ス但シ天工或ハ人工
ヲ撰ハス小児ニハ塩浴ヲ命スヘシ人工塩浴ハ

一浴中ニ食塩五百^{グラム}乃至千五百^{グラム}ニ
至ル稍長スル如釋ニアリテハ海浴ヲ命スヘシ
ニ¹マイ¹イル¹氏ハ脂肪ニ富ミタル腺病性小児ニ
全身ニ濕布ノ纏絡法ヲ稱用ス又硫黄泉浴ヲ稱
スルモノアリ殊ニ腺病性關節炎ニ於テス但シ
虚脱スルモノニハ時トシテ害ヲ招クヲアリ此
ノ如ク其療法諸般ナリト雖モ其素質ヲ良改ス
ル¹甚タ稀ナリ又時トシテ局處疾患増進シ危
險ニ陷キルヲアリ然ルトキハ局處療法ヲ以テ
主トナスヘシ腺病ハ年齒ヲ重ヌルニ從ヒ漸次

素質ヲ消失スルモノアリ然レモ腺病性骨病若シクハ關節疾患ニ由テ死ニ至ルハ成人ト雖モ亦少ナカラス

〔其二〕結核素質○結核

結核ノ名稱ハ即チ此疾病ニ由テ生スル病性産物ノ形狀結節ニ類似スルヲ以テ病名ニ引用セシナリ其産物最初ハ其色灰白ナレモ終ニ變メ黄色トナルモノナリ而シテ其大サ粟粒大ナルアリ或ハ微細ニシテ顯微鏡ヲ用フルニアラサレハ見ルヘカラサルモノアリ

第三十五圖

結核ヲ構成スル細胞ハ白血球ナルカ或ハ
毛細管ヲ構造スル内皮胞ナルカ諸家ノ論
説多シト雖モ未タ一定セス

〔イ〕網膜中

ニ發生セシ微

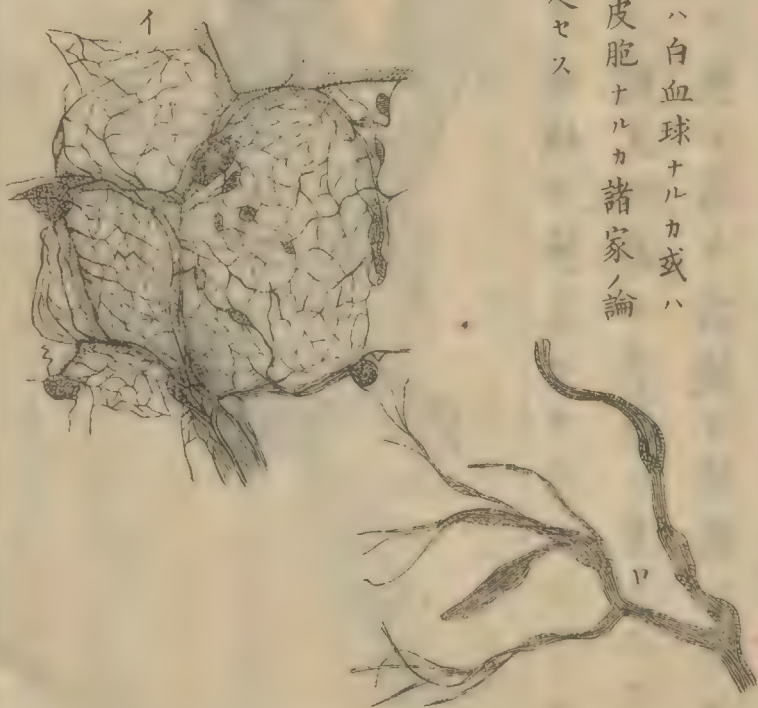
細ノ結核ナリ

〔ロ〕腦動脈ニ

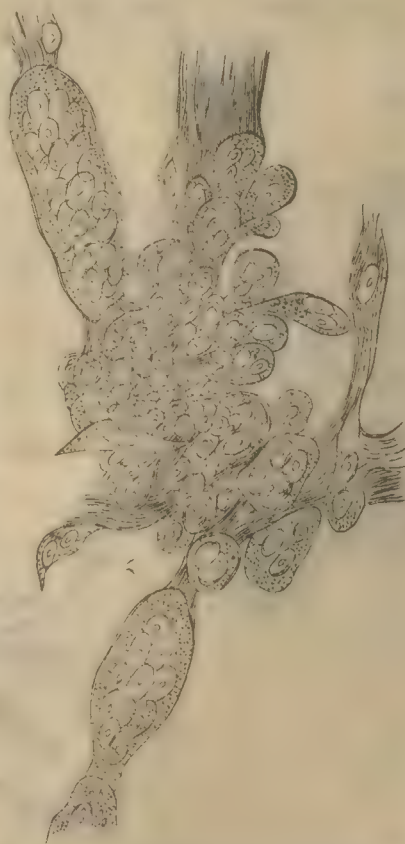
發生セシ微細

ノ結核ナリ

共ニ袖珍
顯微鏡
ニ見レ者



(ハ) 網膜ニ發生ヤシ最モ微
細ナル結核ナリ其大サ真物ニ
比スレバ凡ソ五百倍



人身體中ノ諸器ハ結核ヲ發生セサルモノナレ
ト雖モ自ラ結核ヲ發生シ易キ素質ヲ具フル器
械アリ其最モ之ヲ發シ易キ器械ヲ肺臟トナス

殊ニ肺炎ニ生シ易シ而シテ肺ニ之ヲ發スルヤ
其初メ結核無數同時ニ撒生スル者トス然レ氏
多クハ遂ニ混同シテ一塊ヲ成スニ至ルヲ常ト
ス而シテ氣管枝ノ壁ハ此病機ニ由テ荒蕪ヲ受
クルモノナリ然ルトキハ結核ハ軟化シ且ツ乾
酪質ニ變シテ咯出セラル其他血管モ亦軟化シ
之ニ由テ破裂スルトキハ即チ所謂咯血症ヲ發
ス
肺臟ニ亞キテ結核ヲ生シ易キ器械ヲ喉頭粘膜
尿管粘膜腸膜トナスヘシ又直腸ニ生シテ其

部ニ潰瘍或ハ膿腫ヲ生スルアリ即チ外科術
ヲ要スヘキモノニ屬ス其他結核ヲ生スル器ヲ
骨トトス殊ニ海面狀骨ニ發シ易シ即チ跟骨椎
骨或ハ脛骨端ニ發シ易シ關節膜ニ發スルハ甚
タ稀ナリトス水脈腺ニモ發スルヲ以ナカラス
ト雖モ眞ノ粟粒結核ヲ發見スルハ極メテ困難
ナリトス

結核ノ病理ハ軌迹ニ至リ全ク其面目ヲ改メリ
往時ハ結核ヲシテ一ツハ自然ニ發生スル疾病ト
シ一ツハ其素質ノ遺傳スル者ナルヲ信シテ疑ハ

サリキ故ニ之ニ罹リ易キ體質ノ者ヲ結核性素
質ト稱名セルヲ尚腺病素質ノ稱名アルカ如シ
而シテ此二病ヲレテ同一視セシナリ抑結核ノ
病理ヲ創メテ論說セシハ昔醫レ一子ク氏佛國
大
醫ニレテ千八百
二十六年歿ス
ヲ權輿トナスヘシ同氏ノ說ニ
據レハ小ナル結核様新生物即チ灰白
粟粒結核ハ組織中
ニ自ラ獨發スル一種ノ非炎症病的產物ナリ而
メ其初メ撒生スルモノ漸々混同シ乾酪様變質
ニ由テ轉期ヲ為シ而シテ組織ヲ荒蕪スルモノ
ナリトス故ニ他ノ諸般ノ疾患ヨリ乾酪様ニ變

質セシ結核様物モ亦悉トク之ヲ同病トシテ區
別スルヲナカリキ輓迄ニ至リ「ヒルレヨウ」氏ハ
右ニ述フル乾酪様變質ハ結核ニ特異ノ變質ニ
アラスメ諸般ノ疾患ニ此同性變質ヲ發スルヲ
ヲ發見セリ而シテ結核ノ乾酪變質ハ即チ其一
部ニ過サル者トナセリ故ニ往時肺結核トセシ
モ單易ノ肺勞ニ過サルカ如シ爾來「ニーマイル」
氏等此說ヲ賛成セシヨリ「レー子ツク」ノ說遂ニ地
に墜タリ

輓迄「グー」氏ノ試驗ニ據レハ急性粟粒結核ハ

結核性疾患ノ真性ナリトス而シテ同氏ハ粟粒
結核ヲ多ク時日ヲ經タル乾酪變質部或ハ化膿
ニ陷リシ炎症部ニ於テ發見セリ之ニ由テ更ニ
新奇ノ思想ヲ起セリ其說ニ據レハ結核ハ常ニ
乾酪變質物ヲ吸收スルニ由テ生スルモノナリ
故ニ一部ノ乾酪變質物ヲ吸收シテ之ヲ諸器ニ
傳播スルヲ得ルモノナリ是ニ由テ結核ハ蓋
シ一ノ傳染病ニシテ乾酪變質部ヨリ其害物ヲ
水脈腺肺或ハ骨中ニ取ルモノナラン又結核ノ
細片ハ「エンボリ」トナリ血液若クハ水脈ヨリ

其毒ヲ傳播スルモノナラント云

内臓中殊ニ肺臓ノ疾患ニ由テ生スル菜敗ハ多クハ之ヲ粟粒結核ニ由テ生スル者トナセシガ輓近ノ試験ニ據レハ患部ノ乾酪質ニ變シ或ハ軟化セルハ多クハ即チ慢性潰瘍性炎症ヨリ生スル者ヲ多シト如何トナレハ此ノ如キ患部ニ粟粒結核ヲ發見スルト少ナキヲ以テナリ是ヲ以テ之ヲ觀レハ結核ハ曾テ人ノ想像セシヨリ稀ニ發スル所ノ症トナス可シ且ツ綴令肺勞ニ真ノ結核ヲ合併スルモ結核ハ續發セシモノ

ナルカ如シ又夕必ス結核ヲ發生スト云ニアラ
ス輓近「ニーマイル」氏ノ論說ニ由テ亦古來ノ結
核論ヲ一變セリ同氏ノ說ニ據レハ體中ノ器械
ニ乾酪變質性慢性炎ニ罹リ易キ素質ヲ具フル
者ハ即チ先天ナルヘシト雖ヒ結核ヲ原發スル
素質ヲ先天ニ受クルニアラサルモノトス輓近
豚或ハ家兔等ノ小獸ニ試驗シテ之ヲ徵セリ乃
チ小獸ノ一局處ヲ輕々絶ヘス刺戟スルトキハ
即チ炎ヲ生シ遂ニ乾酪性膿性ノ產物ヲ分泌ス
而シテ患處ヨリ此產物ヲ吸收スルトキハ則チ

結核性惡液質トナリテ洩乙膜肺脾等ニ粟粒結
核或ハ黃色結物ヲ產生シ遂ニ死ニ陷ルモノト
ス右ノ試験ハ「ヒレミン」氏ヲ以テ始メトス爾後
「レシベルト」「ワイス」「ホクス」「タレーズ」「カンハイ
ム」「ガルデニベルグ」「メンセル」等ノ諸氏ニ由テ亦
同効ヲ奏セリ是ヲ以テ之ヲ見レハ結核ナルモ
ノハ一種ノ炎性新生物ニシテ「ブール」氏ノ説モ
亦確實トナスニ足ルヘシ諸家ノ試験ニ據ルニ
右ニ説ク所ノ乾酪變質物ヲ種接スルトキハ蓋
シ之ニ感シ易キ小獸ト否ラサルモノトニ由テ

炎効ニ有無アルヘシ即チ炎症性産物ノ乾酪質ニ
變シ易キ素質ヲ具フル獸ハ之ニ感シ易シ例之
ハ家兎ノ如シ¹ソントフライシ氏曰ク家兎ハ其
組織ニ慢性炎ヲ生スルキハ自ラ結節ヲ生スル
ノ性質ヲ具フルモノナリトス之ニ反メ犬ハ之
ニ結核ヲ殖接スルモ感スルコト絶テナシトス
上件論スルカ如ク結核ノ病理ハ輒迄大ニ面目
ヲ改メリト雖モ諸般ノ外科所屬慢性疾患ト内
臟殊ニ肺臟ノ結核トノ關係ノ如キハ未タ其理
ヲ詳明セサルモノアリ即チ慢性關節化膿或ハ

骨化膿若クハ腫張セシ水脈腺ノ乾酪變質後ニ
肺結核ヲ生スルヲ少ナカラス又夕之ニ反シテ
關節或ハ骨化膿ニ罹ル多年ニシテ遂ニ虛脱ニ
由テ死スル者體中殊ニ肺臟ニ微シモ結核ヲ發
見セサルモ亦少ナカラス是レ蓋シ乾酪膿ヲ
吸收セサルト或ハ之ヲ吸收スルモ結核ヲ形成
スルノ素質ヲ具フルヲナキニ由ルモノナラン
其他此ノ如キ者ニアリテハ只炎部乾酪質ニ變
スルノ素質ヲ具ヘサルノミニアラス結核ヲ產生
シテ之ヲ體中ニ傳播スルノ素質ニ有セサルモ

ノナラン若シ之ニ反シテ炎部ノ乾酪質ヨリ結
核ヲ續生シ易キ一種ノ性質ヲ具フルモノハ之
ヲ所謂結核性素質ト云

療法古來未タ曾テ膿性變質部或ハ乾酪樣變質
部ヨリ結核ノ發生ヲ豫防シ或ハ其蔓延ヲ制ス
ルノ療術ナレ然レモ力所及專ラ病勢ヲ抑制ス
ルヲ謀ルヘシ例之飲食ヲ嚴ニシ慢性骨炎及
關節炎ノ局處療法ヲ施シ加之時期ヲ撰ヒ患肢
ノ切斷或ハ截除術ヲ施コシテ結核ノ發生ヲ妨
クヲ得ルヲアリ又諸般ノ加答兒症ヲ制シテ

結核傳染ヲ防クヘシ

諸般ノ藥品温泉其他諸種ノ攝生法等ハ次ノ目的ニ由テ之ヲ施スナリ

イ既ニ發生スル加答児ヲ制シ或ハ之ヲ消散セシムルニアリ口羸瘦セシ患者ヲ給養スルニア

リハ總テ炎機ヲ發動シ易キモノヲ避ケ而シテ

發熱セサラシムルニアリ其他諸般ノ攝生法及ヒ療法アレベシト雖氏内科ニ譲リ此ニ贅言セ

ス

〔其三〕痛風

痛風ハ通常三十ヨリ乃至四十五ノ年齢ニ多發
スル症ナリ而シテ慢性傷風ト混同シ易シ然レ
氏自ラ別アリ蓋シ傷風ト異ナル所ハ毎年一定
ノ時季ニ發スルモノニシテ而シテ發動セサル間
ハ患者健全他ニ疾ム所ナキ者トス又痛風ナル
モノハ富者ニ多發ス殊ニ平常暖衣飽食シテ生
ヲ樂シムモノニ多ク又遺傳ニ由テ之ヲ患フル
モノアリ總テ高年ニ及ンテ之ヲ發動スルヲ多
シトス其他痛風ニ由テ生スル炎症ハ一定ノ關
節或ハ其周圍ニ限局シテ生スルモノナリ殊ニ

跖指ノ跖前骨ト第一指トノ關節ニ生スルヲ最
モ多シトス所謂ホダグラ_風脚痛之レナリ若シ手
關節ニ之ヲ生スルトキハ之ヲ「シラグラ」_風手痛ト
名ク痛風ニ由テ關節周圍ノ皮膚ニ炎ヲ發スル
トキハ皮膚紅腫シテ緊張且ツ澤色ヲ帶ビ而シ
羅斯ノ如ク疼痛ヲ生スルモノトス時トシテ潰
瘍ヲ生スルヲアリト雖モ甚タ稀ナリ又痛風ニ
罹ル患者ニ動脈脂肪變質ヲ發見スルヲアリ故
ニ腦中風或ハ老人脫疽ヲ併發スルモノ少ナカ
ラス其他肥滿ノ人及ヒ肝臟或ハ腎臟ノ疾患ニ

罹ル者ニ發スルヲアリ殊ニ血中ニ尿酸塩或ハ
尿酸塩過多トナリ腎中ヨリ之ヲ排泄シ凝集シ
テ腎石或ハ膀胱結石等ヲ造リ易スシ又關節面
或ハ關節囊靱帶腱鞘ニ多量ノ尿酸塩ヲ沈降セ
シムルヲアリ痛風發作前ハ患者全身ニ不安ヲ
覺ユト雖モ自然ニ消散ス而シテ炎症ハ通常一
關節ニ發スルモノニシテ傷風ノ如ク同時ニ多
關節ヲ侵サス其炎症ハ十四日乃至六週間ヲ經
過シテ退却シ而シテ關節ニ肥厚ヲ遺コシ荏苒
日ヲ經テ消散ヤス然レモ時トシテ炎症消却セ

ス多年留連治セサルモノアリ又多年痛風ニ罹
 ル患者ハ其關節或ハ腓腓ノ近部ニ石ノ如ク硬
 固ナル病性産物所謂痛風結節ナルモノヲ產生
 ス又皮膚例之ハ耳ニ生スルヲアリ通例ノ脚痛
 風ハ化膿ニ陷ルヲナシ毎常分解スルモノトス
 療法局處及ヒ全身療法ノ二種ニ區別スヘシ痛
 風性關節炎ハ一定ノ經過ヲ有スルモノナリ故
 ニ治術ヲ施コスモ多クハ効ナシ必竟姑息ニ過
 キス治療ノ専務トスヘキハ炎ニ由テ生スル疼
 痛ヲ減少セシムルニアリ殊ニ氷嚢ヲ貼スルヲ

最モ良トス但シ小動脈ノ脂肪變質ヲ具フル者
ニハ經久ニ局部ヲ寒冷セシムルハ良ナラス時
トシテ脱疽ヲ生スルヲアリ又冷晏法或ハ鉛糖
水硝酸銀溶水稀薄ナルモノ及ヒ水蛭ヲ如キハ効少ナ
シ其他濕布纏絡法發汗劑或ハ溫浴ハ經過ヲ短縮セ
シムルヲアリ痛風素質ニハ溫泉浴最モ効アリ
又「カールス」泉其他之ニ類ヲ内服スヘシ其他通
常ノ溫浴ハ急性局處症ヲ制スルノ効アリ

其四、壞血病性惡液質

壞血病ハ毛細管非常ニ脆軟トナリ而シテ之レ

ヨリ皮下出血ヲ發シ易キ疾患ナリ是レ一ハ脉
管ノ破裂ト一ハ血液ノ血管ヲ滲出スルニ由テ
来ルモノトス抑此疾患ノ真性ヲレテ血液ノ溶
崩症トナスモノアリ然レモ血液ニ如何ノ變化
ヲ生シテ斯ル疾患ヲ發スル者ナルカ未タ全ク
詳明ナラス壞血病ハ每常地方病ニ属ス其病理
療法等ハ外科ニ緊要ナラサルヲ以テ此ニ贅セ
ル

〔其五〕 煤毒性惡液質

一般ニ煤毒性疾患ト呼稱スルトキハ即チ瘰癧病

軟性疳瘡、硬性疳瘡ノ三種トナス。然レモ、軌迹ニ至リ、淋病及軟性疳瘡ハ、真ノ梅毒ニアラサルヲ證セリ。即チ全身ニ其毒ヲ蔓延セシメサルヲ以テナリ。

〔イ〕淋病ハ、脛或ハ尿道ノ加答兒ニシテ、即チ粘液ノ分泌過多トナルノ症ナリ。而シテ其病勢ヲ罩丸及ヒ攝護腺ノ排泄管ニ蔓延シ、所謂淋病性罩丸炎及ヒ攝護腺炎ヲ續發スルモノナリ。又淋病性ノ膿ヲ常ニ蓄留スル所ニハ、即チ其刺戟ニ由テ乳嘴、臍、増長シ、所謂尖性「コンヂローム」ヲ發ス。

ルモノナリ

〔口〕軟性疳瘡ハ限局性潰瘍ニシテ通常交接後五六日ヲ經テ龜頭或ハ前皮ニ生スルモノナリ而シテ淋巴管ヨリ其毒ヲ媒妁シテ鼠蹊腺炎ヲ續發シ化膿ニ陷リ易キモノトス

〔ハ〕硬性疳瘡

即チ真性梅毒潰瘍

淋病或ハ軟性疳瘡ハ其病

毒局處ニ止マルト雖_ニ硬性疳瘡ノ潰瘍ヨリ生

スル分泌物ニ傳染スルトキハ直チニ全身ニ其

毒ヲ蔓延スルモノナリ但シ傳染後凡ソ十四日

或ハ時トシテ四週間ノ後患處ニ硬結ヤシ結節

物ヲ發見スヘシ而シテ其所遂ニ潰瘍ニ變ス然
ル後諸般ノ器械ニ慢性炎症ヲ續發ス但シ最初
ハ患部ノ組織炎性產物ニ由テ浸淫セラレ終ニ
頽敗シテ潰瘍トナルモノナリ梅毒ニ由テ發ス
ル諸症ヲ次ニ掲ク

〔イ〕皮膚ニ斑様水泡様物若クハ鱗屑様物ヲ發ス
口咽喉、舌、肛門ニ潰瘍ヲ生ス〔ハ〕骨ニハ成形的
及ヒ潰瘍性骨膜炎及ヒ骨炎ヲ生ス殊ニ脛骨頭
蓋骨鎖骨等ニ生シ易シ

諸種ノ梅毒性即チ真性梅毒慢性炎症產出物ハ通常乾酪

様變質ヲ成スモノナリ殊ニ睪丸肝臟腦ヲ多シ
トス蓋シ肺ニモ亦之ヲ生スル一アルヘシヒル
シヨウ氏ハ梅毒性結核様產出物ヲ護謨腫ト名
ケ又ワーグ子ル氏ハ之ヲ梅毒腫ト名ケリ

梅毒ニ遺傳ナル者アリ即チ胎兒梅毒ヲ受ケテ
生ルナリ蓋シ梅毒性惡液質ハ男子ノ精液ヨリ
之ヲ女子ノ卵ニ傳接スルナラン抑父母共ニ曾
テ健康ニシテ其母受胎ノ間ニ於テ始メテ梅毒
ニ感スルトキハ其毒ヲ胎兒ニ傳フヘキカ又父
梅毒ニ罹ルモ陰莖ニ潰瘍ヲ生スル一ナクシテ

其母受胎スルトキハ胎児其毒ヲ母ニ傳フヘキ
カ否ノ問題ハ未タ詳カナラストス

〔療法〕梅毒ヲ説クニ二種ノ論派アリ梅毒専門ノ
諸家ハ硬軟二性ノ瘡瘡ハ互ニ其性ヲ交換スル
モノナリトス乃チ初メ瘡瘡軟性ナルモ全身ニ
毒ヲ傳フルニ及ヒ漸次ニ變シテ硬性トナルモ
ノナリト云即チ一毒説ヲ主張ス又之ニ反シテ
硬軟二性ハ全ク其性ヲ異ニスルモノナリ混同
スヘカラスト云即チ二毒説ヲ主張スル者ナリ
而説未タ熟レカ真ナルヲ知ルヘカラスト實驗ス

ルニ一人ノ梅毒患者ヨリ其毒ヲ傳染シテ一人ハ軟性疳瘡ヲ生シ一人ハ硬性疳瘡ヲ生スルモノアリ二毒家ハ此ノ如キ症ヲ説明スルニハ二性ノ毒ヲ合併セシモノト云ハサルヲ得ス又其質ノ硬軟ニ由テ之ヲ區別スヘカラスト云ハサルヲ得ス如何トナレハ龜頭ノ周縁或ハ繫帶ノ近部ニ軟性潰瘍ヲ生スルトキハ其滲出物常ニ硬結スルモノナレハナリ既ニ論スルカ如ク軟近ノ論説ニ據レハ痲病及軟性疳瘡ハ局處病ニシテ真ノ梅毒ニアラス硬性ノ者ヲシテ全ク其

性ヲ異ニスル者トシ、眞ノ梅毒トナスモノ多シ
故ニ甲種ノ者ハ局處療法ヲ以テ足レリトス乙
種ノ者ハ全身療法ヲ主トス抑、梅毒性惡液質ヲ
制スルニ往時ハ水銀劑ヲ以テ無二ノ特效藥ト
ナセリ然レモ輓近ノ實驗ニ據レハ往時人ノ尊
奉セシ如キ特效ヲ具ヘサルヘシ夫レ全身梅毒
ハ固ヲ經ルニ從ヒ新陳代謝ノ機ニ由テ漸次ニ
排泄セラル、モノナルカ故ニ總テ新陳代謝ノ
機ヲ亢進セシムル藥劑ハ即チ發汗藥
利尿藥等即チ驅梅
藥ナリ又水銀劑ハ塗擦法或ハ内服トシ用ヰテ

効アリ然レモ水銀ハ真ニ梅毒ヲシテ挫滅セシ
ムル特効アルモノナルカ輒近ニ至リテ此ニ疑
團ヲ置クモノ多シ加之コレヲ久用スル片ハ慢
性中毒症ヲ發スルヲ少ナカラス又々末期ニ於
テハ沃度加里最モ偉効アリ但シ初期ニハ効少
ナシ

慢性炎ノ全身療法ハ既ニ之ヲ論說セリ故ニ次
ニ局處療法ノ最モ緊要ナル者ヲ論スヘシ
イ局處ヲ安靜ニシ且ツ適宜ノ位置ヲ與フヘシ
殊ニ疼痛及ヒ血積殊ニ虛性ヲ見ハスモノニ於

テ然リトス

〔口〕壓迫法

「フ」ラ子ル「繃帶或ハ」ギプス「繃帶若クハ

絆創膏等ヲ纏絡シテ患所ヲ壓重スルヲ良トス
是ニ由テ炎性滲出物ノ吸收ヲ催進スルナリ

〔ハ〕毬布ヲ貼シ或ハ濕冷ノ布片ヲ纏絡シテ効ア

リ纏絡法ハ即チ布片ヲ水ニ醃シ之ヲ患部ニ貼
シ繃帶ヲ施スナリ然ルトキハ初メハ血管收縮
スト雖氏漸次ニ溫ヲ得テ復ヒ擴張ス即チ寒溫
ノ變換ニ從ツテ血管モ亦一縮一張ス之ニ由テ
吸收機ヲ振起セシムルヲ以テ効アルナリ

二、吸收藥 銘糖水、アルニカ煎汁、カミルレ煎等ヲ

布片ニ醃シ之ヲ患部ニ貼シテ効アリ其他水銀

軟膏沃度加里膏沃陣丁幾注ヲ試ムルモノアリ

但シ五滴ヨリ十滴等効アリ輓近電氣ヲ用ユルモノアレ

氏其効驗如何ヲ知ラス

〔ホ〕氷水蛭吸角等ハ真ノ消炎法ナレトモ慢性炎

ニハ効少ナシ但シ諸多ノ外科醫殊ニ「エスマル

ク」氏ハ遲鈍性ノ慢性炎ニ氷嚢ヲ貼スルヲ稱用

ス殊ニ慢性關節炎或ハ骨炎ニ持久シ用テ効

アリトス

〔一〕誘導藥其緊要ナルモノヲ稠厚硝酸銀溶和劑
凡ソ一々ヲ一日ニ冢猪脂ニ溶和スルモノ一日ニ回塗擦稠厚沃陳丁幾發泡
膏吐酒石膏巴豆油ヲ外用スル等之レナリ其他
打膿法貫線法烙鐵ヲ用ユルヲアリ

外科通論

卷十二

川天室龍片

外科通論卷之十二 終

#1305202299
V.12

東京第四大區四小區
湯島五丁目十三番地

出版人

佐藤尚中

右同所

述人

佐藤進

發兌書林

馬喰町二丁目五番地

島村利助

